

特集 「ジェンダー」に寄せて

高 嶋 航

本特集号は二〇二〇年四月一八日に開催されるはずだった史学研究会例会での報告をもとにして編まれたものである。二〇〇六年に始まった例会も、今回で一五回目を迎え、さまざまなテーマが取り上げられてきた。なかでも、前回の例会は「病」がテーマであって、新型コロナウイルスの感染が広がるなかで、新聞で紹介されるなど社会的にも注目されることになった（現在オンラインで公開中）。昨年末に菅義偉首相が『感染症の日本史』を購入したというニュースもあり、その実効性とはかくも、歴史学にスポットが当たること自体は悪いことではない。

ただし、「病」特集はまったく偶然に社会のニーズに合致したというだけで、歴史学・考古学・地理学が扱う対象は、どのように社会に役立つのかわからないものも多い。たとえば、前々回のテーマ「文明」は、人間の世界認識の根本に関わる重要な問題であるけれども、「病」に匹敵するような関心と呼ぶとは思えない。

これに対して、今回のテーマである「ジェンダー」は、社会に役立つにもかかわらず、関心が深まらないテーマといえる。私自身は、今回のテーマを決定した場に居合わせなかったため、どのような経緯で「ジェンダー」が選ばれたのかはわからない。ただ、ジェンダーが歴史学・考古学・地理学はもちろんのこと、学術全般や人間社会全体にとって重要な課題であることは、おそらく異論の余地がなからう。にもかかわらず、今回の報告者が一名を除いて全員女性だったことは、ジェンダーという学問がいかにジェンダー化されたものかを如実に物語っている。ここにも、ジェンダーという古くて新しい問題を史学研究会が改めて取り上げる意義があるように思う。

以下、各論文の概要を紹介しよう。

東村純子「古代日本の布生産と女性」は、古代の機織りの器具と布の規格の関係を検討することで、調庸物や日常衣料のための布が、女性の手によって織られていたことを明らかにした。製織の技術は女性たちの間で長い時間をかけて継承されたものであり、女性たちの「隠れた労働」が古代社会の流通経済を支えていたとの指摘は興味深い。著者の射程は、労働の現場から共同体や国家のあり方にまで及び、さらにはニュートラルな考古学資料をジェンダーの視点で読み込むことの可能性をも示唆している。

鍛冶宏介「江戸時代後期の祇園と一生不通養子娘」は、(意外にも)ほとんど研究がなされていないという江戸時代の祇園について、一次資料を発掘しながら、その歴史的展開を描いた。その知見を踏まえて、後半では「一生不通養子娘」資料(実親との関係を断絶して養子にすることを確認する文書で実質的には身売り契約書だった)をもとに、祇園にやってくる少女たちのライフコースを描いた。彼女たちのほとんどは京都出身であり、「零細な借家群」と「華やかな歓楽空間」が隣り合って存在したことが示される。「一生不通」といいながら、実親との関係が続く事例が見られるのは、地理的な近接性ゆえだろうか。

姚毅「知識の翻訳・生産と身体政治——『婦嬰新説』を中心に」は、イギリスの宣教医ホブソンが撰述した産婦人科の著書『婦嬰新説』を題材に、西洋と中国の間での知識の翻訳、受容、再構築を多様な切り口で分析した。両者の交渉の過程では、身体観や宗教観だけでなく、ジェンダー観の違いが大きな作用を及ぼした。西洋医学の翻訳とは、たんなる翻訳にとどまらず、「文明覇権の絡んだ身体政治」だったと結論する。『婦嬰新説』への反発が、翻訳直後ではなく、中国で西洋医学が優位を占めるようになってから生じたという事実は、まさにこの見方の正しさを裏書きしているように思われた。

帯谷知可「ロシア帝国からムスリム女性の解放を訴える——O・S・レベデエヴァとA・アガエフのイスラーム的男女平等論」は、これまでジェンダー研究でも中央ユーラシア史でも看過されてきた、ロシア語でムスリム女性の解放を訴えた二人の知識人(ロシア人女性とムスリム男性でいずれもムスリム女性は「他者」であった)による女性解放論とその知的世界

を論じる。彼らの思想は「ムハンマドの時代を理想化するある種のイスラーム復古主義」とヨーロッパ近代との混淆物であった。彼らの宗教的な女性解放論は、その後ソ連の社会主義的イデオロギーのもとで、あるいは彼らと関係が深かったトルコの西洋化政策のもとで、埋もれてしまうことになった。

前田更子「信仰と職業——両大戦間期フランスにおける女性教師「ダビデ」の世界」は、アルプスの山間部の村々が舞台となる。著者の問題意識は、ライシテ（政教分離）の空間となった公立学校で、教師たちが自らの信仰の問題にどのように対処したかということだった。雑誌『オー・ダビデ』にちなんでダビデを自称した女性教師たち（多くは独身）は、学校と教会の間で、自らの独立性を保ちつつ、職業と信仰の両立を目指した。「私は世俗主義者以上の者になりたい」「同時に私はカトリック以上の者にもなりたい」というメンバーの言葉が印象的である。

石井香江「女の仕事／男の仕事のポリティクス——ドイツ帝国郵便における性別職務分離の見取り図と展望」は、電話や電信というジェンダー中立的な新しい技術が、女の仕事と男の仕事に振り分けられる過程を明らかにした。女の仕事と男の仕事の境界は、ジェンダー、階級、人種による複合的な作用と政治的な駆け引きによって揺れ動いたが、女性の労働はつねに補助的な地位に置かれた。第二次世界大戦中、帝国郵便は多数の女性を雇用したが、それは女性の経済的解放を促すというよりは、本来の解放の機会を喪失させるものだった。

関村オリエ「ジェンダーと郊外——戦後日本における計画空間の誕生とその変容」は、「人々に同じ価値化や規範を共有させ、それを達成させるという目的を持って開発された」計画空間である戦後の都市郊外が、職場と住居を分離させることで、生産に従事する男性と再生産に従事する女性という家族のあり方を規定したこと、「男性本位」「大企業本位」の社会政策がこうした構造を固定化してきたことを解明し、今後の都市郊外のあり方について提言を行う。地理学とジェンダー、あるいは空間とジェンダーの結びつきは非常に新鮮に感じた。

以上、七篇の論文は、扱う地域（日本、中国、ロシア、ヨーロッパ）も時代（古代、近世、近代、現代）もばらばらだが、共

通する点も少なくない。東村論文、鍛冶論文、前田論文、石井論文、関村論文はいずれも女性の労働を対象とし、女性の労働を隠蔽してきた男性中心な社会や学問を批判する。東村論文、姚論文、石井論文は、一見中性的な技術が、いかにジェンダー化されたものを教えてくれる。「性別職務分離」は近代における生産領域と再生産領域の分離がもたらしたと石井論文は分析するが、関村論文は同じ問題を空間からアプローチしている。姚論文と帯谷論文は、非西洋地域の人々が西洋近代の学術にいかに向き合ったか、そこに宗教がどのように関わったのか、という問題意識を共有している。宗教については、帯谷論文と前田論文がともに歴史研究で宗教に着目することの今日的意義を述べている点が残った。

本特集の扱う時代と地域は多岐にわたるが、メッセージは鮮明である。ジェンダーが幅広く応用できる優れた分析視角であることの証である。もし例会が開催されていれば、全体討論で興味深い議論が展開されたに違いない。例会が中止されたことは、かえすがえすも残念である。「ジェンダー」をテーマとする本号はよくできたものであり、ぜひ一篇一篇熟読されたい。むしろ私が心配しているのは、次のテーマ「減び」である。いったいどんな内容になるのか、楽しみよりも不安が大きいというのが正直な気持ちである。本年四月一七日の例会はオンラインでの開催となる予定なので、遠方にお住まいの方もぜひ参加していただきたい。

(補記) 二〇二二年二月三日、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長が女性を蔑視する発言をしたことが問題となっていた。ジェンダー研究の成果を発信しつづけることの意義を改めて感じさせられた出来事であった。

(本会常務理事)